祐天上人の菩提寺最勝院

大正大学教授　玉山成元

スーパーひたち号という列車ができた。ステンレスばりのスマートなボディー。客席も三列でゆったりしており、飛行機に乗ったような感じである。サイドの肘かけのところにラジオがあり、イヤホーンでクラシックやポピュラーミュージックなどが聞けるようになっている。そして合間に沿線の説明や旅行の宣伝も入る。窓外の景色をめでながらぼんやりしていると、あっという間に時間が過ぎてゆく。福島県いわき市の平は、上野からこのスーパーひたち号で一四〇分。平の落ちついた街並を通り、車で浜海道を北に進むこと十数分、家屋がとぎれるところに仁井田川がある。右手に大きな本堂の瓦屋根が見える。橋を渡って堤防沿いに右折するとすぐ左に赤い柱の山門が見える。落葉時であり、境内にある銀杏の大樹の根本は、大きな黄色の円座をしいたようで趣が深かった。この寺が護念山最勝院。祐天上人の生家、新妻家の菩提寺である。

『浄土宗寺院由緒書』によると、最勝院は、天正十七年（一五八九）ごろ、当地岩城氏の一族である白土隆軌が、良十上人を招いて一寺を建立し、永代常念仏を念じて諸願成就の祈願道場とした寺という。新妻家と最勝院との関係がいつごろできたのか明らかではないが、最勝院に現存する伏鉦の銘によると、明和五年（一七六八）三月十五日、祐天寺六世祐全上人が、新妻家先祖代々諸精霊追善として常楽院に寄附したことがわかる。そうなると少くとも明和五年まで新妻家は常楽院の檀家であったことになる。常楽院は、安全山といい、天正三年（一五七五）良室呑廓上人の開山した寺であるが、現在は廃寺となり、最勝院と合併した。こうして新妻家の墓地も移転したのであろう。本堂の右脇、東側にひときわ大きな石碑がある。中央には祐天上人のお名号「南無阿弥陀仏」が、そして名号の右側に「増上寺前大僧正明達社顕誉上人愚心祐天大和尚」、左側に「享保三戊戌天七月十五日八十六歳」と刻まれている。また石碑の方面には「楽誉浄安居士」と父重政氏の法名が、左面には「松誉妙貞大姉」と母の法名が刻まれている。背面にも何か刻まれているようであるが、全く読めない。

それはともかく最勝院は、元禄年間から祐天上人とのかかわりを持っている。最勝院什物の仏具や新妻家の借用状案などは、そのよい証拠といってよい。半鐘は庫裡玄関の左手、周り廊下の角にポールをたて、それに吊ってある。元禄六年（一六九三）七月に祐天上人が寄進したものである。鐘には「新田村最勝院什物」とあり、鋳物師の西嶋伊賀守の名も刻まれている。また最勝院には大きな双盤がある。そこには新田村最勝院什物とあり、祐天上人が三界万霊追善のため寄進したことが刻まれている。年代は記されてないが、作者は粉河屋久左衛門とある。おそらく江戸の職人であろう。

祐天上人は菩提寺に仏具ばかりではなく、多類の金子も寄附している。『新妻家文書』案によると、延享四年（一七四七）七月、井上河内守正経は、最勝院の常念仏料七十両を借りている。もちろんこの金は新妻小左衛門政明の附助金であるが、

裕天上人の菩提寺最勝院

大正大学教授　玉山成元

利子の額は不明である。ただこの借金の証人として飯嶋左内以下五人が連署している。また明和六年（一七六九）十月には、牧野越中守貞長が、最勝院の不断念仏料七百両を借りている。この金は祐天上人が元禄年中（一六八八－一七〇三）菩提寺の最勝院に、永久に念仏を続けて供養するための費用として、つまり不断念仏の布施として寄進したものである。証文の受取人は、祐天寺御役僧中と、最勝院ならびに常念仏の施主新妻小左衛門政明の三者になっているので、個人的なものではない。この金を牧野は一年間、月一割の利子で借りている。しかもこの間に所替があれば全額支払うが、常念仏料は大切な金子であるから、万が一のことを考えて、上仁井田・下新田・上戸田・下戸田・狐塚・長友・名木・上片寄・下片寄等の対々を担保に入れ、もし借金の返済ができなければ、これらの村々からの入米のうち、千七百石をさしあげるようにするといっている。千七百石の利子をかせげる元金がどのぐらい価値のあるものか想像がつくであろう。

このように祐天上人は、まだ若かった元禄年間に、多額の費用を最勝院に寄附し、先祖新妻家の菩提を弔うとともに、やがて自分の菩提をも弔ってもらう逆修の布施、さらには三界万霊の諸精霊を弔うための常念仏料として最勝院に多額の金を寄附している。形の上ではその施主は新妻家となっているが、最勝院と祐天寺が責任をもってこの金を貸しつけ、その利子が常念仏の興行、あるいは最勝院の経営ができるようになっていた。だから最勝院にとって祐天上人は大檀越である。そのため今でも本堂は祐天上人の御影堂の形式をとっている。本尊阿弥陀様の前に、葵の紋のついた厨子に入っている祐天上人を安置しているのはそのためである。童顔に緋衣を着し、七条袈裟をつけられた祐天上人像は、今なお参詣者にあたたかくほほえみかけ、救済の手をさしのべているように見える。